

糸あやつり人形一糸座
人形浄瑠璃公演

「糸あやつり人形一糸座とは」

糸あやつり人形一糸座は、江戸に生まれ今日まで400年近く日本に伝わってきた糸あやつり人形の技術を受け継いでいる劇団です。糸あやつり人形一糸座は、その古典の技術を受け継ぎながら、現代の演出家や作家達と共同で、新しい芝居創りも行っています。2015年には、イタリア・ボローニャ大学から招かれ、大学生たちとのワークショップ、そして「古典と新作」の上演を行い、その技術と芸術性は高く評価されました。糸あやつり人形一糸座は、古典の上演だけでなく、現代の人たちに向けた意欲的な作品創りも行っている劇団です。



演目

東海道中膝栗毛 橋弁慶
伊達娘恋緋鹿子

出演

糸あやつり人形一糸座

知ってますか? ~10月1日は「国際音楽の日」です~

1977年にユネスコの要請で設立された国際音楽評議会という会議で、翌年の1978年から毎年10月1日を、世界の人々が音楽を通じてお互いに仲良くなり交流を深めていくために「国際音楽の日」とすることにしました。日本では、1994年から毎年10月1日を「国際音楽の日」と定めています。

「文化芸術による子供育成総合事業 -巡回公演事業-」

我が国の一流の文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた舞台芸術を鑑賞する機会を得ることにより、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげることを目的としています。

事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演では、できるだけ子供たちにも参加してもらいます。

江戸時代より継承されてきた糸あやつり人形の技をご覧頂きます。

とうかいどうちゅうひざくりげ あかさか なみき らんとうば
東海道中膝栗毛―赤坂並木から卵塔場― 原作:十返舎一九

やじろうべえ きだはち こと えど と だ かみがた む のんき たび つづ
弥次郎兵衛と喜多八は、ヒョンな事から江戸を飛び出し、上方に向けて呑気な旅を続けています。そしてここは赤坂の宿はずれの並木道。日も暮れてあたりが薄暗くなってくると、二人は卵塔場（墓場）に迷い込んでしまいます。臆病な二人は、そこにやって来た子どもを一目小僧と間違え殴ってしまいますが、その子は酒を買いに行った子どもだったので大きな声で泣き出してしまいます。その声を聞きつけたおじいさんがやって来て、弥次郎兵衛の胸ぐらをつかみ、何故孫を殴ったと問い詰めます。

やじろうべえ きだはち どうちゅうぎ けいみょう えど まえ たの いただ
弥次郎兵衛、喜多八の道中記を、軽妙な江戸前のセリフでお楽しみ頂きます。



はしべんけい
橋弁慶

うしわかまる きょうと ごじょうおおはし まいよ つうこうにん うでだめ いど けらい
牛若丸は、京都五条大橋で毎夜通行人に腕試しを挑み、家来にすべ

ゆうし さが いっぼう ひえいざん むさしぼうべんけい ごじょうおおはし
き勇士を探しています。一方、比叡山の武蔵坊弁慶は、五条大橋で

つうこうにん なや もの うわさ き したが ごじょうおおはし
通行人を悩ます者の噂を聞き、これを従えようと、五条大橋にやっ

てきます。そこで初めて弁慶と牛若丸は出会います。牛若丸が腕試

しに弁慶の大雑刀の柄を蹴り上げると、怒った弁慶は雑刀を振りか

ざして切りかかりますが、牛若丸はヒラリヒラリと橋の欄干を飛び

まわ 回リ、とうとう打ち負かしてしまいます。弁慶はその若者が牛若丸

と聞いて降参し、主従の契りを結びます。

= 出演 =

人形：結城 一糸 結城 民子 結城 敬太

結城まりな 眞野トウヨウ 土屋 渚紗

- 他 糸あやつり人形一糸座

浄瑠璃：竹本綾之助 竹本綾一

三味線：鶴澤三寿々 鶴澤津賀榮

鳴り物：望月太意三郎

案内役：永野 和宏

(日により出演者が異なります。)

だてむすめ こいのひがのこ やおや しちひ みやぐら ば
伊達娘恋緋鹿子 ―八百屋お七火の見櫓の場―

やおや むすめ しち きちさぶろう しゅじん とのさま あず たいせつ かなな むす
八百屋の娘、お七のいいなづけ吉三郎は、主人が殿様から預かった大切な刀を盗まれ

てしまい、それを取り戻さないと切腹しなければなりません。吉三郎を助けるため、

お七は盗まれた刀を見つけ、その刀を吉三郎に届けようとしませんが木戸が閉まってい

て届けることができません。困ったお七は、火事と偽って火の見櫓の太鼓を打ち、木

戸を開けさせ刀を届けようとしします。火事ではないのに火の見櫓の太鼓を打つ事は禁

じられていましたが、お七は恋人吉三郎の命を助けるため、必死に太鼓を打ちます。

八百屋お七の名場面を糸あやつり人形でご覧頂きます。(江戸時代は夜には町々の木

戸が閉められ通行ができなくなっていました)



<日本の糸あやつり人形>

日本には古くから伝わっている、糸であやつる人形があります。今回みなさんにご覧頂くのは、江戸に生まれ伝わってきた糸あやつり人形です。日本の糸あやつり人形の特色は、日本独特の四角い手板についている十数本の糸を遣って、驚いたり悲しんだり、喜んだり、といった繊細で細やかな表現をすることです。

文楽もそうですが、江戸の糸あやつり人形も、浄瑠璃と組み合わせることで、複雑な物語を上演するための技と術を、長い歳月をかけて獲得してきました。そして世界に誇れる日本独特の糸あやつり人形浄瑠璃が生まれたのです。

日本の糸あやつり人形のルーツは、はっきりとはしていませんが、古い文献によると元和三年(1617年)「日本橋で、浄瑠璃に合わせて踊る糸あやつり人形を見て面白かった」という文章が載っています。このことから日本では、390年以上前から糸あやつり人形が盛んに行われていたことが伺えます。その人形と技は、絶え間なく改良を加えられて現在にいたっています。

令和2年度
文化芸術による子供育成総合事業 一巡回公演事業一

「糸あやつり人形 一糸座 とは」

糸あやつり人形一糸座は、江戸に生まれ今日まで400年近く日本に伝わってきた糸あやつり人形の技術を受け継いでいる劇団です。糸あやつり人形一糸座は、その古典の技術を受け継ぎながら、現代の演出家や作家達と共同で、新しい芝居創りも行っています。2015年には、イタリア・ボローニャ大学から招かれ、大学生たちとのワークショップ、そして「古典と新作」の上演を行い、その技術と芸術性は高く評価されました。

糸あやつり人形一糸座は、古典の上演だけでなく、現代の人たちに向けた意欲的な作品創りも行っている劇団です。

糸あやつり人形一糸座
人形浄瑠璃公演



演目

とうかいどうちゅう ひざ くりげ はしべんけい
東海道中膝栗毛 橋弁慶
だて おすめ こいのひ がのこ
伊達娘恋緋鹿子

出演

糸あやつり人形一糸座

知ってますか? ~10月1日は「国際音楽の日」です~

1977年にユネスコの要請で設立された国際音楽評議会という会議で、翌年の1978年から毎年10月1日を、世界の人々が音楽を通じてお互いに仲良くなり交流を深めていくために「国際音楽の日」とすることにしました。

日本では、1994年から毎年10月1日を「国際音楽の日」と定めています。

「文化芸術による子供育成総合事業一巡回公演事業一」

我が国の一流の文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた舞台芸術を鑑賞する機会を得ることにより、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげることを目的としています。

事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演では、できるだけ子供たちにも参加してもらいます。

江戸時代より継承されてきた糸あやつり人形の技をご覧頂きます。

とうかいどうちゅうひざくりげ あかさか なみき らんとうば
東海道中膝栗毛—赤坂並木から卵塔場— 原作：十返舎一九

やじろうべえ きだはち
 弥次郎兵衛と喜多八は、ヒョンな事から江戸を飛び出し、上方に向けて呑気な旅を続けています。そしてここは赤坂の宿はずれの並木道。日も暮れてあたりが薄暗くなってくると、二人は卵塔場（墓場）に迷い込んでしまいます。臆病な二人は、そこにやって来た子どもを一目小僧と間違え殴ってしまいますが、その子は酒を買いに行った子どもだったので大きな声で泣き出してしまいます。その声を聞きつけたおじいさんがやって来て、弥次郎兵衛の胸ぐらをつかみ、何故孫を殴ったと問い詰めます。

やじろうべえ きだはち どうちゅうぎ けいみょう えど まえ たの いただ
 弥次郎兵衛、喜多八の道中記を、軽妙な江戸前のセリフでお楽しみ頂きます。



はしべんけい
橋弁慶

うしわかまる きょうと ごじょうおおはし まいよ つうこうにん うでだめ いど けらい
 牛若丸は、京都五条大橋で毎夜通行人に腕試しを挑み、家来にすべき勇士を探しています。一方、比叡山の武蔵坊弁慶は、五条大橋で通行人を悩ます者の噂を聞き、これを従えようと、五条大橋にやってきます。そこで初めて弁慶と牛若丸は出会います。牛若丸が腕試しに弁慶の大雑刀の柄を蹴り上げると、怒った弁慶は薙刀を振りかざして切りかかりますが、牛若丸はヒラリヒラリと橋の欄干を飛び回り、とうとう打ち負かしてしまいます。弁慶はその若者が牛若丸と聞いて降参し、主従の契りを結びます。

= 出演 =

人形：結城 一糸 結城 民子 結城 敬太

結城 まりな 眞野 トウヨウ 土屋 渚紗

他 糸あやつり人形一糸座

浄瑠璃：竹本 綾之助 竹本 綾一

三味線：鶴澤 三寿々 鶴澤 津賀榮

鳴り物：望月 太意三郎

案内役：永野 和宏

(日により出演者が異なります。)

だてむすめ こいのひがのこ やおや しちひ みやぐら ば
伊達娘恋緋鹿子—八百屋お七火の見櫓の場—

やおや むすめ しち きちさぶろう しゅじん とのさま
 八百屋の娘、お七のいいなづけ吉三郎は、主人が殿様から預かった大切な刀を盗まれてしまい、それを取り戻さないと切腹しなければなりません。吉三郎を助けるため、お七は盗まれた刀を見つけ、その刀を吉三郎に届けようとしませんが木戸が閉まっています。困ったお七は、火事と偽って火の見櫓の太鼓を打ち、木戸を開かせ刀を届けようとし、火事ではないのに火の見櫓の太鼓を打つ事は禁じられていたお七は恋人吉三郎の命を助けるため、必死に太鼓を打ちます。八百屋お七の名場面を糸あやつり人形でご覧頂きます。(江戸時代は夜には町々の木戸が閉められ通行ができなくなっていました)



<日本の糸あやつり人形>

日本には古くから伝わっている、糸であやつる人形があります。今回みなさんにご覧頂くのは、江戸に生まれ伝わってきた糸あやつり人形です。日本の糸あやつり人形の特色は、日本独特の四角い手板についている十数本の糸を遣って、驚いたり悲しんだり、喜んだり、といった繊細で細やかな表現をすることです。文楽もそうですが、江戸の糸あやつり人形も、浄瑠璃と組み合わせることで、複雑な物語を上演するための技と術を、長い歳月をかけて獲得してきました。そして世界に誇れる日本独特の糸あやつり人形浄瑠璃が生まれたのです。日本の糸あやつり人形のルーツは、はっきりとはしていませんが、古い文献によると元和三年(1617年)「日本橋で、浄瑠璃に合わせて踊る糸あやつり人形を見て面白かった」という文章が載っています。このことから日本では、390年以上前から糸あやつり人形が盛んに行われていたことが伺えます。その人形と技は、絶え間なく改良を加えられて現在にいたっています。